会報
札響くらぶ
2023年 5月 第101号
編集・発行／札響くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

第35回 札響くらぶサロン

バストロンボーン 澤山雄介さん その味わいはワイン ときにはビール

「札響くらぶサロン」は令和5年2月25日（土）に開かれました。小雪の舞う中島公園を歩いて豊平館へ向かう私の足どりは、寒さに震えながらも浮き浮きとしていました。「ようやくコロナ禍から抜けたのかな」との喜び大爆発。参加者40名。内訳は会員34名、講演者1名、演奏者2名。札響関係者3名でした。

お話は八木幸三さん。昨年、札幌音楽家協議会会長になられて名実ともに札幌音楽愛好者の代表です。その軽妙洒脱な語りにいつも感心させられてしまいます。「札響定期演奏会プレトーク」は4月から9月までの聴きどころで、第652回定期。ラフマニノフ生誕150年記念、交響曲第2番。ラフマニノフは1873年、ロシア北西に位置する旧ロシア帝国ノヴゴロド州セミョノヴォに生まれました。両親は帝政ロシアの貴族階級出身。壮大な気品あるラフマニノフ音楽のルーツを感じさせます。

私はこの曲を10年以上前に札幌のアマチュアオーケストラで演奏したことがありました（チェロ担当）。この長大な曲を川瀬賢太郎指揮・札響がどんな素晴らしい演奏を聞かせてくださるのでしょうか、今からワクワクしています。

第653回定期で取り上げられるブラームス・ドイツレクイエム。聞かせていただいた昔の演奏、札幌合唱連盟の合唱で、私も合唱団の一員として歌った記憶がありますが、その時の演奏かどうかは定かではありません。ピアノ伴奏でばかり歌っていた私は「さすがオーケストラ、札響はすごいな」と思ったことを覚えています。若き尾高忠明さんの颯爽とした指揮が印象的でした。第654回定期は反田恭平さんの登場です。「チケットの入手困難」の大予想。その他、お話には戸沢宗男さんなど懐かしいお名前が大勢登場しました。

右から八木幸三さん
上田文雄会長
鳥居和比徒
札響専務理事

次いで「楽譜支援金贈呈式」。

上田文雄会長より札響・鳥居和比徒専務理事に目録が手渡されました。「札幌に響く素晴らしい音楽は私たちの誇り。今後とも一層の名演奏を期待します」。新聞でも報道され、私共も誇らしい気持ちになりました。

第2部は「ミニコンサート」。

札響バストロンボーン奏者の澤山雄介さんの演奏でした。ピアノは永沼絵里香さん。「今日はいつにもまして男性の会員が多い」それは男性的なバストロンボーンの素晴らしい音色の魅力のためだったのでした。

ロベルト・シューマン、ヨハネス・ブラームス、ウジェーヌ・ボザ、クロード・ドビュッシー、スーレン・ヒルガード。19世紀から21世紀のつい先ごろ亡くなった方まで西ヨーロッパの作曲家を取り上げていただきました。使用した2本の楽器はドイツのクロマトとアメリカのバック。クロマトの音色はドイツ・ワインの味わい、バックはビール。「言い得て妙」です。永沼さんの名伴奏との絶妙なコンビネーション。美味な音楽を堪能できました。

最後に「これからも皆さんで札響を応援していきましょう！」との上田会長のお言葉で閉会となりました。

永沼絵里香さん 澤山雄介さん
ドイツのクロマトと
アメリカのバックを持って

会員／松本良一

6月～8月　定期演奏会　hitaru 定期演奏会　名曲コンサート

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

名曲コンサート
6月17日（土）14：00
コンサートマスターと
ヴァイオリン独奏
フォルクハルト・シュトイデ

■ブラームス　ヴァイオリン協奏曲

二十年あまりかけ、やっと書き上げた交響曲第1番の後、ブラームスは堰を切ったように交響曲第2番や「悲劇的序曲」などを次々に書き上げる。そうした作曲家として充実していた時期にサラサーテのヴァイオリン演奏に感銘を受け書かれたのが、この名曲である。ブラームスは、交響曲でもそうであったようにベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を大きな目標としていた。それは、ともに二長調で田園的、牧歌的おもむきが多分に感じられることでも言える。名ヴァイオリニスト、ヨアヒムの助言を受けながら叙情的なものと構成的なものを見事に総合させた作品として完成させた。はじめは4楽章形式だったものをヨアヒムの助言で中間のアダージョ楽章とスケルツォ楽章を破棄し、現在の「弱々しいアダージョ」に書き換えられている。それでも40分近くに及ぶ大作で第1楽章が全体の半分以上を占めている。全体的に男性的な力強さに満ち、特に第3楽章などは逞しい生命の息吹を感じさせるヴァイオリンのボーイングが堪能できる。

フォルクハルト・シュトイデ

■J.シュトラウスⅡ　「くるまば草」序曲、ワルツ「もろびと手をとり」、常動曲、入り江のワルツ、ポルカ「雷鳴と稲妻」

「ワルツの父」と呼ばれた父親の反対を押し切って19歳で音楽家としてデビューしたシュトラウスⅡは、父親や弟などをはるかにしのぐ名曲を残し、「ワルツの王」と称えられるまでになった。彼は、二百曲に迫るワルツや百曲以上のポルカをはじめ、「こうもり」などオペレッタの分野でも多くの傑作を残し、作品総数は八百曲を越えている。また、舞踏曲をはじめ大衆に好まれる親しみやすい作品にもかかわらず、その作品群はウィーンの「ニューイヤーコンサート」をはじめ、古今東西のコンサートで演奏される普遍的な芸術作品となっている。産業革命で急速に機械化が進んだ当時を反映した「常動曲」や、題名の雷を表現したのではなく、鋼鉄製の巨大な大砲を題材にしているとも言われる「雷鳴と稲妻」など、シュトラウス音楽の醍醐味がたっぷりと楽しめるプログラムだ。

第654回定期演奏会
6月24日（土）17：00
25日（日）13：00
指揮　広上淳一
ピアノ　反田恭平

■ラフマニノフ　ピアノ協奏曲第3番

ラフマニノフが米国初演を目的に作曲したこの作品は、1909年に作曲者自身のピアノとニューヨーク交響楽団により初演された。また、翌年にはマーラーの指揮という豪華な組合せも実現している。この曲は、規模が大きく、よりロシア的色彩が濃いのも特徴で、冒頭のピアノ主題はロシア正教会の聖歌から採られていると言う。今、超人気の反田恭平が、この超絶技巧作品を札響と共にどう作り上げるか、今年の大注目公演だろう。

■ドビュッシー　イベリア（管弦楽のための「映像」より）

「映像」と題する3つの作品集を残したドビュッシーは、その第3集を管弦楽のために書いた。この第3集は「ジーグ」「イベリア」「春のロンド」の3曲からなり、今回演奏される「イベリア」は「街々より道へ」「夜の匂い」「祭の日の朝」の3楽章から成っている。この曲は、イベリア半島のスペインの情緒が作品の発想となっているが、具体的な描写性はなく音楽から醸し出される雰囲気から作曲者が心眼に映じた印象的なものだ。

はじめにスペインのセヴィリヤーナ風の舞曲のリズムが華やかに聞こえ、「夜の匂い」では、作曲者らしい全音音階的な響きが幽玄で幻想的な世界をつくりあげる。終楽章は、夜のとばりがほのかに明け、躍動的なリズムが人々の賑わいを徐々に感じさせる。祭の日の活気に溢れた一日のはじまりだ。

■ラヴェル　スペイン狂詩曲

「管弦楽の魔術師」と呼ばれたラヴェルの最初の管弦楽曲であるこの曲は、スペインのバスク地方出身の母親が歌っていたスペイン民謡に影響を受けてつくられたと言う。はじめに書かれた「ハバネラ」に続き、「夜への前奏曲」など2台のピアノのための作品4曲が、彼の卓越したオーケストレーションによりスペインの妖艶で情緒溢れる雰囲気を醸し出している。ドビュッシーの「グラナダの夕べ」が、「ハバネラ」の盗作だというラヴェルの主張は有名で、2曲を聞き比べると確かに雰囲気は良く似ている。「スペイン狂詩曲」が作られた1年後にドビュッシーは「イベリア」を作曲しているが、スペインを題材とした二人のライバル意識は実に興味深い。

広上淳一　©Masaaki Tomitori

反田恭平　©Yuji Ueno

hitaru シリーズ定期演奏会 第14回
8月3日（木）19：00
指揮とチェンバロ　鈴木優人
ピアノ　阪田知樹

■プーランク　フランス組曲

エドアール・ブールデの戯曲『王妃マルゴ』のための付随音楽として書かれたこの組曲は、プーランクが実在した主人公の同時代に生きた作曲家クロード・ジェルヴェーズの舞曲を素材として作っている。古い時代の舞曲の雰囲気を残しながらもプーランク的な新しい和声が使われており、新鮮な魅力にあふれている。編成は管楽器を中心とする10人あまりの室内楽で、スネアドラムの勇ましい導入部からトランペットなどが明朗な旋律を奏で、その後には荘重な和声や古風で優雅な旋律など7曲が次々に演奏される。鈴木優人のチェンバロによる弾き振りも楽しみのひとつだろう。

鈴木優人　©Marco Borggreve

阪田知樹　©Hideki Namai

■グリーグ　ピアノ協奏曲

「北欧のショパン」とも呼ばれたグリーグは、ノルウェーを代表する作曲家だ。リストやシューマンなどのドイツロマン派音楽の影響はあるものの、この曲はノルウェー民謡風の旋律の巧みな使用から醸し出される北欧的な抒情の美しさを感じさせる。また、幸福な結婚直後の作曲だけに、溌溂とした若々しい情感が豊かに息づいており、さらにピアノの名手でもあったグリーグだけに、独奏部のピアニスティックな華麗な表現は、この分野を代表する名曲のひとつとなっている。

■武満徹　夢の時

この曲は武満作品に定評のある札響にとって、特に思い入れのある作品だ。なぜなら今から40年ほど前に岩城宏之指揮の札響で初演されているからである。もとは舞踊のための音楽として書かれ、タイトルは作曲家の永遠のテーマの一つ、「夢」が示されている。

短いエピソードが、一見とりとめなく浮遊するように連なり、非現実的な全体を構成している。札響の透明感のある響きを聴きながら10分あまりの心地よい「夢」に浸って欲しい。

■ストラヴィンスキー　「火の鳥」組曲（1919年版）

筆者は、大学でファゴットを専攻していたのだが、「春の祭典」の冒頭で、この楽器ではあまり使われない高音域の独奏に驚愕した覚えがある。低音楽器というイメージのファゴットをこれほど大胆に使い、しかも絶大な効果を引き出した作曲者は、他に「火の鳥」、「ペトルーシュカ」と共に原始主義と呼ばれる3大バレエ曲を書き、センセーションを巻き起こす。「火の鳥」は、その3大バレエの最初の作で、ディアギレフひきいるロシア・バレエ団公演のために委嘱され、発表当時はそれまで無名だった作曲者を一躍問題の人とし、公演の大成功は彼の将来を約束させた。1911年に作曲者自身が演奏会用組曲としたが、今回は19年に出された2管編成版でお聴きいただく。

名曲コンサート
8月26日（土）14：00
指揮　マックス・ポンマー

マックス・ポンマー

■J.S.バッハ　ブランデンブルク協奏曲 第3番

いつの時代にも就職活動は大変であるが、バッハはそれまで仕えていたケーテン侯レオポルトの音楽熱が冷め、宮廷楽団も縮小される事態となり、新天地を求め辺境の貴族に作品を献呈して就職を有利にしようとしていた。ブランデンブルク公に献呈するにあたっての書面からも、その意図が伺える。6曲からなるこの協奏曲は、当時として考えうるあらゆる楽器編成の可能性を動員し、また楽想のたくみな連用によって、当時の貴族はもちろん現在の聴衆をも魅了させる傑作となった。

今回演奏される第3番は、実際はヴァイマル時代に第6番と伴に2番目に書かれた。コンチェルト・グロッソとしては型破りで、独奏部と合奏部の区別がなく、各楽器が互いに両者になりあって、反響的効果をだすことをねらっているようだ。

■ベートーヴェン　交響曲第8番

比較的演奏機会の少ない第8番は、全交響曲の中で最も規模の小さい作品ながら全体的に均整が取れ、唯一メヌエット楽章を置く古典的な性格の強い作品だ。この作品は、緩徐楽章がなく全体的に明るく快活で演奏時間も短いため一気に聴けてしまう。第2楽章は、メトロノームの発案者のためにつくられた「メルツェルのカノン」が転用されベートーヴェンのチャーミングな側面がうかがえ、さらに第3楽章は、青年期のヨゼフィーネへの思いとは違う、「不滅の愛人」と呼ばれるベッティーナへの大人の恋心が感じられる優雅な楽想だ。

■ブラームス　交響曲第4番

ブラームスの交響曲を全般に「渋い音楽」と感じられている方は多いのではないだろうか。特にこの第4番は、まさに人生の苦楽を経験した熟年向きの音楽だ。まず、この交響曲はホ短調という哀愁を漂わせる感傷的な調性ではじまり、第2楽章では長調ながら古い教会旋法のフリギア調を用いて、懐古的な雰囲気を色濃く出している。また、終楽章では、バロック時代に用いられたパッサカリアという舞曲から派生した古い変奏形式を甦らせ取り入れている。全体的に対位法的で、古いゴシック的な印象。管弦楽の編成もオーソドックスでオーケストレーションも極めて古典的に書かれている。そうした新古典主義者らしいブラームスの集大成的作品なのだが、そこに流れる旋律はやはりロマンティックで聴く回数が増すごとに味わいが深まっていく。

（写真協力　札幌交響楽団）

♪ 楽員さんに興味津津 34

フルート副首席奏者　川口 晃（かわぐちあきら）さんに聞く

空気の振動で 奥深い音色が

プロフィール

石川県金沢市出身。12 歳よりフルートをはじめる。東京藝術大学を経て同大学院修了。第 61 回全日本学生音楽コンクール大阪大会第 2 位、第 18 回コンセールマロニエ 21 入選など。これまでにフルートを山下共子、田代真佐子、神田寛明、萩原貴子、斎藤和志、野津臣貴博の各氏に師事。ミシェル・モラゲス、ラファエル・レオーネ(ピッコロ)のマスタークラスを受講。東京を中心に、全国各地のオーケストラへ客演するなど研鑽を積む。2018 年 7 月、6 か月の試用期間を経て札幌交響楽団に入団。

夢は電車の運転手

出身は石川県金沢市です。高校を卒業するまで金沢にいました。中学校の遠足は兼六園という環境で、通った学校はどこもすぐには文字変換できないような名前の学校でした。小立野(こだつの)小学校、紫錦台(しきんだい)中学校、二水(にすい)高校。どこも音楽とは無縁の学校です。

小学校の時は特にこれといって夢中になっていたものはなかったです。ピアノは習っていましたが、なかなかうまく弾けなくて初歩のソナチネ・アルバムで挫折してるようなありさまでした…。それでも、何となく続けていたという感じです。4年生の時にトワイライトエクスプレスに乗って北海道に家族旅行に行ったのを機に乗り物(公共交通機関、電車、バス、飛行機etc.)にハマって、当時は電車の運転手になるのが夢でした。

小樽駅で
トワイライトエクスプレスと

ベルリンフィルとラトルが！

フルートを始めたのは中学生になってからです。母がフルートを吹いていて家に楽器があったのがきっかけです。すぐに音が出ましたし、楽譜が一段で書かれていて、ピアノに比べればずいぶん簡単で、いろいろなことができて楽しい！と思っていました。学校の吹奏楽部での活動と、地元の先生に就いてレッスンを受けるようにもなりました。

中学2年になったタイミングで、フルートの先生に勧められて「石川県ジュニア・オーケストラ」に入りました。オーケストラ・アンサンブル金沢が本拠地とする石川県立音楽堂もこの頃に完成して、ジュニアオケもそこが活動拠点です。「こけら落とし」に招聘したのは、なんと世界のベルリン・フィル！見栄っ張りな金沢人らしいですね…笑

その事業の一環で、幸運なことにジュニアオケもベルリンフィルメンバーから直々に指導を受けるという機会がありました。ＰＭＦでお馴染みの首席フルート(当時)、アンドレアス・ブラウにはフルートパートのレッスンを、指揮者のサイモン・ラトルには全体合奏で「エグモント序曲」をリハーサルしてもらいました。

この時の経験はぼくにとってかけがえのないものです。ラトルの指示でみるみる音が変わっていくのを経験して「オーケストラってなんて楽しいんだろう！」という思いを強く持ちました。音楽の道に進んでみようかな、と漠然と思い始めたきっかけにもなっていると思います。

ひたすら練習の日々

高校生になって自分でも音大進学を意識していたところ、新しく師事した先生から東京藝術大学を勧められました。当時は音大がどういう所かもよくわからず、とにかく頑張らないと入れないという所だ、と一生懸命に練習した記憶があります。高校2年から習い始めたＮ響の神田寛明先生には基礎から叩き込

アンドレアス・ブラウ氏のレッスン

ラトル氏に声をかけられる

んでいただきました。また、改めて受験に必要なピアノとソルフェージュを小さいころに習っていたピアノの先生に習うことになるのですが、実は先生は作曲科出身で、ソルフェージュは本当に厳しく仕込まれました。受験にそこまでのレベルが本当に必要なのかと思うほどで…今ではそれがとても役に立っていてありがたく思っています。先生方の厳しい指導があってこそ、今の自分があると思っています。

大学時代はひたすら練習の日々です。音楽コースや、吹奏楽の強豪校出身ではなかったので、それが当たり前だった同級生たちに圧倒されっぱなしでした。オーケストラに入りたかったので、ソロのコンクールよりはオーケストラのオーディションや、室内楽などを進んでやっていました。ピッコロも自ら進んで…。当時のフルート専攻はコンクール命、といった雰囲気でしたのでだいぶ浮いていたと思います。

ラトル氏の指揮

エリシュカの「チェコの音」

地元のオーケストラアンサンブル金沢を皮切りに、各地のオケのエキストラで経験を積ませてもらいながら、オーディションを受け続けました。オーディションが縁でエキストラに呼んでいただいたオケも多くあります。

札響は、お声かけいただいていましたが、都合が合わず実はエキストラで来たことがありません。演奏も聴いたことがありませんでした。オーディションで北海道に来たのが、小学生のときの旅行以来のことでした。

大学フリー時代に札響とは縁がありませんでしたが、札響の首席客演指揮者だったラドミル・エリシュカの指揮で学生時代に二回演奏したことがあります。最初はエキストラとして出演した大阪フィル、二回目は音大フェスティバル。大フィルでは「新世界」、音大フェスティバルでの曲目は「わが祖国」をご一緒しました。大フィルの時は初めましてのオーケストラで緊張していたのもあって、あまり記憶にありませんが、音大フェスの時のことはよく覚えています。

エリシュカは練習の時、あまり多くは指示をせず、ただ普通に振っているだけなのに、自然とオケがエリシュカの求める音を出すようになり、「チェコの音」に近づいていきました。これは本当に不思議な経験でした。指揮者がただそこにいるだけで音が変わる、自分たちが高められるという、貴重な経験として記憶に残るのは、中学生の時のラトルとエリシュカの二回だけです。札響はエリシュカとの縁が日本で一番深いオケですよね。そんなこともあってか、不思議と馴染むのに時間はかからなかったように思います。（実はまだ入団して5年です！）

各地域のオケにはそれぞれの個性がありますね。できて数十年の時間を経るうちに地域性が出てくるのだと思います。少し昔の上手か下手かというベクトルだけではなく、今は個性や地方の色を含めた奥行きの深さが、それぞれのオーケストラで楽しめるように思います。

札響はさわやかで、よい意味であくが強くない、自然・泰然とした音楽を響かせるオケだと感じています。地方オーケストラの中でもかなり魅力的な音色を持っているのではないでしょうか。オーケストラのある町出身者として、このように全国どこの地域でもクオリティの高いオケがあることは、とても素晴らしいことだと思っています。

北海道の季節は爆発する

札幌に引越してきたのは一月。まずは、その寒さと雪にびっくりしました。車道まで雪と氷で真っ白、道路の雪を水で融かしている金沢の寒さとは全く違います。氷点下でスマホを長時間使うとバッテリーが落ちるという経験も初めてでした。その時は何というところに来たのだろうと思いましたが、それが一年過ごしてみるともう離れられなくなりました。四季折々の魅力が本州とは全然違いますね。長い冬がある分だけそれ以外の季節は凝縮されていて、季節が爆発するようにやってくる感じがします。人が少ないのもいいですね。パーソナルスペースが広いという感覚です。そんな中で暮らしているから北海道の人は伸び伸びとしているのでしょうね。最初の印象とはうって変わって、今は北海道と札幌が、とても気に入っています。

趣味…といえるかわかりませんが、好きなものは鉄道です。札響の留萌公演の時に、廃線が決まっていた留萌駅を見に行ったり、廃止される特急車両に乗るために、時間を計算してわざわざＪＲで行ったりしたこともあります。分類すれば「乗り鉄」ということになるかも知れませんが、ダイヤを作ったり、廃線跡を見に行ったり、模型を眺めたりなど。鉄道のシステム全般が好きなんだと思います。北海道は「さよなら運転」の方が多く寂しい限りですが…。

愛国駅で
キューロクとともに

一昨年にあった鉄道をテーマにしたコンサートは、最高の企画だったのですが、共有できる人があまりいなくて少し残念でした。

ぼくはオーケストラや他の楽器とのアンサンブルの中でのフルートに魅力を感じています。ほかの楽器は、弦やリード、打楽器ならば膜や金属など必ず実体が振動していますが、フルートにはそれが無くて、直接空気が振動する。シンプルが故に奥深い音色を持っていて、ほかの楽器がいてこそ、違う表情が出せるのではないかと思います。

フルートはソロ楽器としては音量が大きい訳ではないですが、楽器の組み合わせによってすごくよく聞こえたり、いいアクセントとして聞こえたり（中で吹きながらそれを想像するのはとても難しいのですが…！　勉強中です）、「オケ中」で音色が映える楽器だと思っています。

鶴田さん　東京の聴衆を唸らせる

札響副首席トランペット奏者の鶴田麻記さんが、1月17日東京オペラシティ主催のリサイタル「B→C（ビートゥーシー）２４８」に出演されました。

釧路出身の鶴田さんは、東京藝術大学を卒業後、札響に入団、数々のコンクールで受賞歴を持つ若手女性トランペット奏者のホープです。この「B→C」リサイタルシリーズは、実力ある個性的な若手演奏家が招聘される伝統のリサイタルです。

会場の東京オペラシティリサイタルホールは天井の高いシューボックス型で、当日は聴衆で埋め尽くされていました。

プログラムは、前半「B＝バッハ」と後半「C＝コンテンポラリー」で構成され、ピアノ伴奏は下田望さん（藝大研究員）、ヴァイオリンは同僚の赤間さゆらさん（札響）が受け持ちました。

先ず演奏されたのはカーゲルの「オールド／ニュー」で、このリサイタルの古典と新作の相反する魅力について暗示させる曲でした。前半「B＝バッハ」では、「協奏曲ＢＷＶ９７２（原曲／ヴァイオリン）」を得意のピッコロトランペットで奏し、「コラールＢＷＶ６５３、他２曲」はトランペットで高らかに演奏されました。清らかで柔らかな音色は私の耳を捉えました。

続いてヘンデルの「オーボエ協奏曲ＨＷＶ３０１」をピッコロトランペットで披露。鶴田さんの十八番（おはこ）のこの曲では、華麗で安定感のある演奏に聴衆は呆気にとられ、第２楽章（アレグロ）の後、曲の途中でしたが拍手が入りました。

後半の「C＝現代曲と新作」では、鶴田さんの真骨頂が発揮されました。近藤譲の「冬の間に」はトランペットとピアノにヴァイオリンも加わる異例の難曲。横一列に並べられた譜面を移動しながら挑み、特性が違う楽器を見事に融合させました。

続く武満徹の「径（みち）」は、ミュートをスタンドに固定して頻繁に付け外しする無伴奏の楽曲。ミュートを付けた時の繊細な響きと外した時のダイナミックな響きによって生まれる遠近感は、無限に拡がる宇宙を回遊しているように聞こえました。

そして鶴田さんが西村朗氏に委嘱した「深紅の呪文」の世界初演。ピアノの強烈な連打で開始。一瞬のうちに会場は西村サウンドに染まりました。鶴田さんは持ち味のセンスでこの楽曲を自分のものにし、鮮やかな色彩を放ち聴く者を魔法にかけました。演奏を聴いていた西村氏はステージに呼ばれて喝采を受け、終演後にはファンに囲まれて、新曲の成功を讃えられていました。

最後は超絶技巧を要するベリオの「セクエンツァX」でした。ピアノの反響板に向かって鋭い音を叩きつけ、ピアノを共鳴させるなど特殊奏法とタンギングの妙技による演奏でした。大胆な奏法と微小な響き、そこから紡ぎ出されるミラクルなサウンドは圧巻でした。

アンコールは赤間さんが再び登場し、トリオで演奏。宮本正太郎の洒落たアレンジによるバッハの「主よ、人の望みの喜びよ」で、祈るように閉じました。

鶴田さんの類い稀な技と大らかな演奏は、東京の聴衆を唸らせました。

これからも札響でご活躍されますことを期待しております。

会員／高木誠一

札響東京公演　＋　冬の旅

２月９日、サントリーホールで開催された東京公演に行って来ました。いつもは雪が降ったら困るので二泊三日なのですが、今回は私の早とちりで四泊五日の旅になりました。

公演までは川崎大師を参拝したり、同期と立川にある昭和記念公園、国立極地研究所の知り合いを訪ねたりしました。そして当日は小田原城見物の後、風が冷たくなった夜、サントリーホールに。たまに来るからか、カラヤン広場から徐々に気持ちが高まって来て、ホールに入ると何かが違うという雰囲気を感じました。

さて着席してふと思ったのが、隣の人はなぜこの演奏会に来ているのだろうか？でした。そこでコロナも落ち着いてきたので思いきって聞いてみることに。左側の人はフルートのハインツ・シュッツのファンとのこと。右側の人は親御さんが札幌出身ということもあって「札響をいつも応援しています。私がパトロネージュになり紹介券を札幌にいる叔父夫婦にプレゼントしています。法事などで札幌に行った時はキタラでも聴いています。」とのこと。思わず「ありがとうございます」と言ってしまいました。

シュッツ(Fl)　吉野直子(Hp)　バーメルト(指揮)

（写真協力　札幌交響楽団）

開演のチャイムが鳴り、周りを見渡すと席がかなり埋まっていました。楽員も「入っているね～」と言っているように見渡していました。前半は武満徹の「雨ぞふる」、モーツァルトの「フルートとハープのための協奏曲」、フルートもハープも音が良く聴こえたのはナゼかな？　定期演奏会を土・日、そして東京公演と三回聴いたのですが、私はこの演奏会が一番良いと思いました。それに好きな曲でしたのでとても楽しめました。終演後、両隣の人に「これからもよろしくお願いします」と声をかけて、ホクレンの片栗粉をいただきホールを後にしました。

この演奏会ではちょっとしたハプニングがありました。「ザ・グレート」の第２楽章が終わった時、拍手とともに「〇〇さん良かったよ」との声がかかったのです。ステージはそのまま何事もなかったかのように第３楽章に入りました。この行為は人によっては意見がわかれるところだと思いますが、皆さんはどう思われるでしょうか？

来年の東京公演は１月31日だそうです。「演奏会＋冬の旅」を楽しみにしています。

会員／神　秀夫

～遠き日そして遥かなる日～

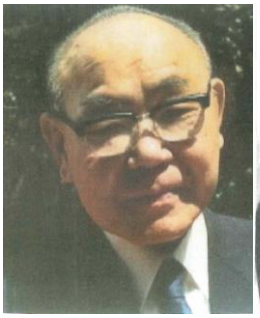
二代にわたる名指揮者と二人のトランペット奏者との邂逅

プロローグ

ライラックもアカシアも散った初夏の札幌でウイルヘルム・ロイブナー氏が率いるN響の演奏が旧市民会館のこけら落としとして開催されたのは1958年7月のことであったが、その3年後の1961年の6月に札響は誕生した。

私の故郷は山形県の鶴岡市（相良守峯―東大名誉教授―、藤沢周平―作家―の出身地）であるが、同じ鶴岡市出身のN響のトランペット奏者として来札された野崎季義氏とお逢いするのは、私が国民学校（今の小学校）一年生のとき以来のことであり、楽屋に彼を訪ねると13年ぶりであるにも拘わらず記憶してくださっており「札幌にも立派なコンサートホールが出来ましたね。東京以北随一でしょうね。このうえは、立派なオーケストラが出来ればよろしいですね。」とおっしゃられた。彼は鶴岡中学を卒業後家業のお菓子屋を継ぐことはなく難関といわれた東京の市谷にあった陸軍音楽学校に合格し研鑽を積むことになる。聞くところによると中学時代からひそかにマンドリンを演奏していたが戦時下で音楽をなりわいとすることはかなり困難ではあったものの一途の思いは両親の説得も功をなさなかったらしい。

一九四八年日響（現N響）入団の頃



故野崎季義氏

二代の名指揮者
―尾高尚忠氏と忠明氏―

1961年の札響の誕生以来歴代の名指揮者のうち私がとくに印象に残るのは尾高忠明氏であり、少年の日に鶴岡市で聴いたご尊父尾高尚忠氏のことを思いださずにはおられなかった。

忠明氏はとくに青少年の音楽教室の施行には熱心であるが、これはご尊父尚忠氏の「青少年に音楽を通した心の豊かさを与えよう」という想いと軌を一にする、言い換えると尾高家のDNAに思えてならないのである。

1950年（昭和25年）といえば、食糧の飢餓もさることながら、青少年にとって精神的な飢餓も大きな問題になっていた頃であり、1950年N響（当時は日響―日本交響楽団―と呼ばれていた）が鶴岡市で公演したときに鶴岡市および近隣の中学生を公会堂に集めて「中学生のための音楽教室」を開いてくださったのである。

のち武蔵野音楽大学教授

尚忠氏は各楽器のレパートリーを丁寧にわかりやすく説明されたあと、各部門の代表者に名曲の一小節を演奏させて聴かせてくださった。チェロの大村卯七氏のあと、トランペットの野崎季義氏が登場した。彼はドヴォルザークの新世界交響曲の第4楽章の出だしを高らかに、しかも格調高く演奏して満場の喝采を浴びた。あの清澄な音色は私の脳裡に今も鮮やかに残っている。

鶴岡は遠く鳥海山をのぞみ、月山、羽黒山、湯殿山に囲まれ、近くの庄内平野には「海に入るまで濁らざりけり」と昭和天皇が詠まれた最上川が流れる。

国破れて山河ありというが、あの音色は国は破れ、父が早逝した私にとっては「しっかりしなさいよ。」と鼓舞されたような感じであった。

それから四半世紀経った1975年（昭和50年）、ベルリン自由大学医学部に留学中に日本を代表するトランペット奏者、田宮堅二氏（のち桐朋音楽大学教授―現名誉教授）とベルリンオペラで知り合うことになる。ベルリンオペラで「さまよえるオランダ人」を演奏された後、私が会釈をしたことがきっかけであった。

その後二人が帰国したあとは、私が主宰した学会の開会のファンファーレを彼に演奏していただいたこともあって、その交流は現在も続いている。彼を有名にした出来事の極め付きはサントリーホールのこけら落としの演奏に彼が指名されたことであろう。

田宮堅二氏（桐朋音楽大学名誉教授）

彼のご尊父は小説家、田宮虎彦氏であるが、彼が都立石神井高校一年のときトランペット奏者になるべく練習を続けているのを知って心配し、相談を持ち掛けたのが友人の河盛好蔵氏（当時　東京教育大学―現筑波大学―教授）であった。河盛氏は文芸評論家として第一人者であり、私も何篇かの著書を読んだことがあるが最も印象に残った言葉は、「若いときにえたロマンチズムはその人間の一生を支配する。」ということである。察するに河盛氏がご尊父に「やらせて御覧なさい。」とでもいうしかなかったのではと思われる。

この二人のトランペッターは意外なところで接点を持っている。田宮氏が桐朋大学生の時、N響の野崎氏の指導をうけていることは驚くべきことであるが、野崎氏が演奏を終わったあとトランペットを新聞紙にくるみ、それを唐草模様の風呂敷に包んでいるのをみて「先生、なぜ風呂敷に包んでいるのですか？」と聞いたところ「恰好つけて何になるのさ」という答えが返ってきたという。由来、荘内人はシャイなところが多く、藤沢周平の小説にもうかがわれるが、ケースにいれていかにも「音楽家です。」というスタイルを彼は好まなかったのであろう。

野崎氏は河盛好蔵氏の「若い時に得たロマン」を全うされ逝去されたが、田宮氏には今後も後進を指導されて人生という五線紙のうえにさらに立派に名曲を奏でていただきたいと思う。

―札響と尾高尚忠、忠明両氏に捧ぐ二首―

60周年を超えた札響に短歌二首をささげ、今後ますますの発展を祈念して結びとしたい。

六十年先人の技
いや継ぎて
札響の調べ常に麗し

尾高氏のパフォーマンスは
華麗なり
父尚忠氏の面影残し

会員／鈴木重統

僕の愛聴盤⑤
最高級のオーデコロンの香り
ビロードのような声で歌われる素敵な歌曲

○亡き王女のためのパヴァーヌ
（ラヴェル）
アンドレ・クリュイタンス指揮
パリ音楽院管弦楽団
（62年頃録音）

貴族的な気品とほのかな色気をふくんだ第一ホルンの旋律があたりの空気をそっと震わせる。他の楽器群が抜群のファッション感覚で寄り添う。わずか72小節、演奏時間7分前後にすぎないこのパヴァーヌは近代フランスのエスプリ満載である。聴く者は冒頭からとらえどころのない夢の世界を逍遥するが、それが例えようもなく心地よい。

僕が初めてこの管弦楽曲に耳を傾けたとき、ほぼ同じ楽器を用いながら、なぜこうもドイツ系オーケストラ作品と雰囲気がことなるのか、仰天するとともにヨーロッパ文化のふところの深さに目を見張ったものだった。感受性の柔軟な少年期にこのディスクに出会えたことも幸運だったのであろう。

1960年前後にビゼー、フォーレ、ドビュッシーのLP録音で、これぞフランスのエスプリを世に送り出し、確固たる名声を確立したクリュイタンス。しかし、彼の美質はラヴェルの音楽でひときわ精彩を放った。「ダフニスとクロエ」「ボレロ」等のディスクは半世紀以上を経過した今でも他の追随を許さない決定盤となっている。「亡き王女のためのパヴァーヌ」の演奏は、僕にとってその頂点に立つ存在なのだ。弱音機をつけた弦楽器がかもしだすシルクの肌ざわり、なまめかしいまでの管楽器の音色が聴く者を包み込む。

最高級のオーデコロンの香り。

○私の詩に翼があったなら
（アーン）
ブルーノ・ラプラント(B)他
（74年録音）

軽快で短いピアノのアルペジオに導かれて、人々を一瞬にして魅惑の園へといざなう「私の詩に翼があったなら」はレイナルド・アーンのとびっきり素敵な歌曲である。シャンソンの香りを漂わせるロマンチックな曲想は一度とりこになったら、二度と離れることはできないであろう。僕にとっては宝物のような存在である。

しかもこの歌曲は作曲者13歳の時の作品だそうである。文豪プルーストと親交を温めるなど、パリのサロンで話題をさらったこの早熟の天才は10代で立て続けに歌曲を発表し続けた。「景色」「恋されるひと」など聴く者の胸の奥まで染み入る抒情がチャーミング極まりないが、何といっても、ヴィクトル・ユーゴの詩に作曲されたこの作品が白眉である。

ユー・チューブを覗くと、女性歌手の歌声がにぎわい見せているものの、僕にとってはラプラントが歌うこのディスクにとどめを刺す。ビロードのような光沢に輝くバリトンの歌声は「わたしの詩は飛び立つでしょう。やさしく、ほのかに、とても美しいあなたの庭に向って、もし、わたしの詩に翼があったなら、鳥のような翼が…」（河本喜介訳詞）の詩と一心同体となったロマンの彼方まで僕たちを運んでくれるのだ。

限りなくオシャレ感覚に満ちあふれたこのディスク、若い時にフランス語を勉強しなかった限界と口惜しさを感じつつも、その魅力に酔い続ける昨今である。

会員／村岡範男

運営スタッフ活動報告 下半期（10月～3月）

○10月17日(月)
運営会議 12名出席
○11月 3日(木・祝)
第34回札響くらぶサロン
豊平館 30名参加
第1部 講演「事務局長になって」
第2部 特別講演「音楽と私」
札響事務局長 多賀登さん
○11月21日(月)
運営会議 8名出席
○11月26日(土)
札幌市内中学生招待事業
南ケ丘中学校 17名
○11月27日(日)
札幌市内中学生招待事業
稲穂中学校 24名
平岡中学校 26名
○11月30日(水)
会報99号発送
○12月19日(月)
運営会議 11名出席
○1月16日(月)
運営会議 11名出席
○2月5日(日)
札幌市内中学生招待事業
新陵中学校 11名
○2月20日(月)
運営会議 12名出席
○2月24日(金)
会報100号発送
○2月25日(土)
第35回札響くらぶサロン
豊平館 40名参加
第1部 プレトーク
札響くらぶ顧問 八木幸三さん
第2部 ミニコンサート
バストロンボーン 澤山雄介さん
ピアノ 永沼絵里香さん
○3月5日(日)
札幌市内中学生招待事業
厚別中学校 24名
○3月20日(月)
運営会議 13名出席

スタッフの声

▼一昨年の札響くらぶの総会は、コロナの影響で文書総会となり、採決もハガキによることになり、約110通が返送され、貼ってある切手を調べたところ77種類の切手が貼られていた。たかがハガキ63円、だけどほぼ1通ごとに違う切手が貼られていたことになり驚きだ。（武藤）

▼農業経済関係の研究に携わっていたためか、今でも僕はスーパーなどを覗くのが好きだ。最近の食料品価格の上昇はひどい。金さえ払えば食い物は手に入るのだ、という歴代政権の傲慢な政策が一気にほころびを見せたと言わざるをえない。（村岡）

▼エスコンフィールドでのファイターズ開幕試合を観戦。セレモニーで場内暗転し、光の演出と共に、小柳ゆきさんと札響登場！ 圧倒的歌唱力と響き渡る生演奏に感動。ゆきさんのツイッターにこの模様と札響への感謝のコメントが載っています。（深井）